つらくても生き抜いて

集団暴行で次男亡くした女性講演

京都

圭司さんの遺影を掲げ、高校生に訴える市原さん（舞鶴市上安久・日星高）

遺族の痛み 生徒に訴え

一九九九年に高校二年生だった息子を同級生らの集団暴行で亡くした岡山県備前市の市原千代子さん（55）が十二日、舞鶴市の日星高で講演し、「どんなにつらいことや悲しいことがあっても、生きて、生きて、生き抜いて」と呼び掛けた。

舞鶴・日星高

次男の圭司さんは「電話に出ず、態度が生意気」などの理由で暴行を受け、硬膜下血腫で亡くなった。

市原さんは、圭司さんの遺影を掲げながら「病院では顔に付けられた靴跡を見ることができず、ひたすら足をさすっていた」と当時を振り返り、「気が狂えるなら狂いたいと心が叫んでいました。家族みんなが同じ気持ちでした」と遺族の深い悲しみを話した。

「わたしのようなつらい思いをする母親も、圭司のような命を奪われる子もいらない」と、自分と他人の命をともに大切にするよう訴えた。一―三年の二百四十五人が静かに耳を傾けた。

市原さんは、圭司さんの友人と交流を続けることで生きる希望を取り戻し、二〇〇二年から、学校を中心に講演活動をしている。府内での講演は初めて。

（森敏之）

暴力振るう手にしないで

「命の授業」日星高で

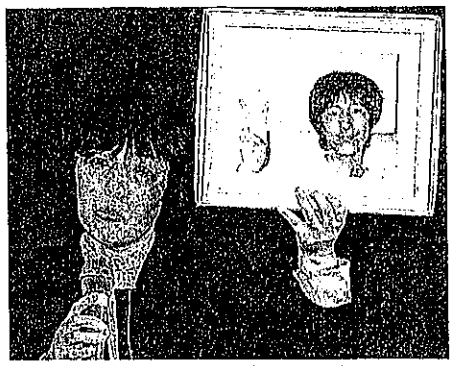
朝日

息子奪われた女性 生徒240人に語る

息子を犯罪で失った苦しみを胸に、学校現場で命の大切さを訴える活動を続けている岡山県備前市の市原千代子さん(55)が12日、舞鶴市の日星高校で、自らの経験を語りかける「命の授業」を開いた。NPO法人「おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズ」理事を務める市原さんの言葉に、生徒約240人が耳を傾けた。

（岩井建樹）

市原さんの次男・圭司さん（当時18）は99年、先輩や同級生に呼び出され、暴行されて死亡した。当時不登校だった圭司さんが「資格を取れる学校に行ってやり直したい」と、新たな目標を持った直後だった。市原さんは圭司さんのはれ上がった顔を直視できなかったという。



市原圭司さんの写真を掲げ、命の大切さを訴える母の千代子さん＝舞鶴市の日星高校

講演では事件の経緯を説明。事件後、「つらかったね」といった気遣いの言葉に苦しみ、当時高校生の長女には「生きている私を見て」と訴えられた経験を紹介した。心の支えは、自宅に足を運んでくれる圭司さんの友人たちだったという。

市原さんは会場の生徒らに手を合わせるように求め、「温かいでしょう。死んだら冷たくなるの。決して暴力を振るう手にはしないで。つらいことがあったら周囲の大人に相談して」と訴えた。

日星高3年の有馬佑奈さん(18)は「ふつうの生活をしていることに感謝しないといけないと改めて思いました。今後も、命の尊さを考えていきたい」と話した。

20 12 13

読売

「生き抜いて」

舞鶴・日星高で講演

集団暴行息子亡くす 岡山の市原さん

圭司さんの写真を掲げて命の尊さを訴える市原さん（舞鶴市の日星高校で）

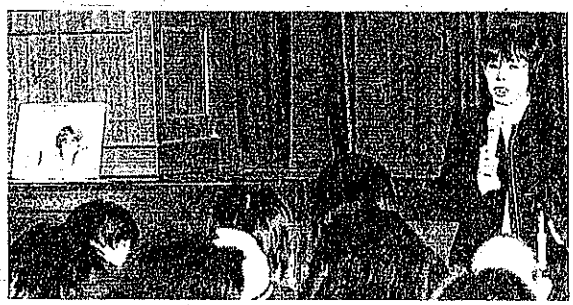
集団暴行で子どもを亡くした経験から、命の大切さを訴える講演活動をしているNPO法人「おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズ」理事の市原千代子さん(55)（岡山県備前市）が12日、舞鶴市上安久の日星高校で講演し、約250人の生徒が聴き入った。

市原さんは1999年3月、当時高校生だった息子の圭司さん（当時18歳）を先輩や同級生らからの暴行で亡くした。

圭司さんは、流産や死産を経た後に恵まれた待望の次男だった。しかし、高校2年で友だちから暴力を受けるようになり、やがて休学。その後、何とか「やり直したい」と前に足を踏み出そうとした直後の事件だった。

遺族となった市原さんは当初、周囲の励ましを素直に受け入れられなかったという。しかし、圭司さんの友人たちが支えてくれたことが励みになったと振り返り、「つらいこと、悲しいことがあっても生きて、生きて、生き抜いてほしい。少し先にいいことが必ずあると思って下さい」と力を込めた。

生徒を代表し、3年の有馬佑奈さん(18)は「ほかの人の命も自分の命も簡単に奪えるものではないと思う。命の尊さを改めて考えていきたい」と話した。



圭司さんの写真を近くに置き、命の大切さについて語る市原さん＝舞鶴市の日星高で

毎日

生きて生きて生き抜いて

日星高で人権講演会 犯罪被害体験語る

息子を同級生らによる暴力で亡くした経験を持つ、NPO法人「おかやま犯罪被害者サポートファミリーズ」理事の市原千代子さん(55)＝岡山県備前市＝が12日、舞鶴市上安久の日星高校の人権集会で講演し、「生きて生きて生き抜いて。つらいことがあっても、その先にはいいことがあるはず」と生徒約240人に語りかけた。

市原さんの次男、圭司さん(当時、18歳)は99年3月、同級生や先輩ら3人に呼び出されて暴行を受け、亡くなった。市原さんは「顔は傷だらけで、額には踏みつけられたとみられる線がいくつもあった」と振り返った。圭司さんは2年間の休学中で「人とかかわる仕事がしたい」と目標が見え始めた直後だったという。

市原さんは圭司さんの遺影を近くに置き、生徒らに「手を合わせ、右手で左手を握ってください」と話し、「温かく動いているのは生きているということ」と語りかけた。そして、「暴力を振るったり、交通事故で誰かの命を奪う手になることを知ってほしい」。

最後はいじめによる自殺が急増している現状を紹介し、「生きていると悲しくつらいこともある。周りの大人に相談してほしい」と訴えた。

【村上正】

20 12 13